

平成 27 年度「立正大学研究推進・地域連携センター研究支援費」研究成果報告書

1. 種目 第 1 種

2. 研究課題名 「人間の脆さの自覚」に着目したケアロジーの構築

3. 研究代表者

研究代表者名		所属部局名	職名
たけうち	せいいち	文学部	准教授
竹内	聖一		

4. 連携研究者

連携研究者名		所属部局名	職名
たんじ	きょうこ	仏教学部	准教授
丹治	恭子		
せきみず	てっぺい	社会福祉学部	専任講師
関水	徹平		

5. 研究実績の概要

当該年度に実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、申請書に記載した「研究目的」、「研究計画・方法」に照らし、600字～800字で、できるだけ分かりやすく記述して下さい。

前年度に受けた研究助成「領域横断的なケアロジーの展開と組織化」の研究成果として刊行された『ケアの始まる場所 哲学・倫理学・社会学・教育学からの11章』。その中で浮かび上がってきたのは、ケアを行い、またケアを受ける人間の脆さであった。こうした脆さを自覚した人間がとり結ぶケア関係の実相に迫ることを目指して、学内外の多様な分野の研究者との共同研究を継続した。

研究の主題となったのは、引きこもりや女性の貧困問題、学問の世界における男女共同参画および、若手研究者支援という二つの動きの間の緊張関係、また海外でベビーシッターとして働く女性が受けている搾取の問題などであった。それらの問題の多くにおいて明らかとなったのは、ケアを受ける人間だけでなく、ケアをする側の人間もまた、「脆さ」を抱えていること、そして両者の抱えている「脆さ」が、問題を複雑にし、ケア関係を緊張に満ちたものになっていることであった。

研究会において議論を重ねる中で、こうした緊張を可視化し、それを解きほぐしていくには、一方向からの考察や分析では限界があるということも再確認された。というのも、ケア関係は単に個人と個人の関係ではなく、ある一定の社会や組織を背負った個人と個人の間であり、そうした社会や組織の成立には相応の歴史があるからだ。こうした複雑に入り組んだ要素を整理し、解決の糸口を探るには、本研究のように、多様な分野の研究者の共働が不可欠である。これまで継続して研究助成を受けて共同研究を進めてきたことで、こうした共同の素地が十分に出来上がったと考えている。

6. 研究発表（平成 27 年度の研究成果）

〔雑誌論文〕 計（ ）件 うち査読付論文 計（ ）件

著者名	論文標題			
雑誌名	査読の有無	巻	発行年	最初と最後の頁

〔学会発表〕 計（3）件 うち招待講演 計（0）件

発表者名	発表標題		
丹治恭子	認定こども園施策にみる保育施設の役割 ——家族像との関連から		
学会等名	発表年月日	発表場所	
日本保育学会第68回大会	2015年5月	椋山女学園大学	

発表者名	発表標題		
関水徹平	「ひきこもり」経験と〈問い〉		
学会等名	発表年月日	発表場所	
日本現象学・社会科学会第31回大会	2015年12月	立正大学	

〔図書〕 計（ ）件

著者名	出版社			
書名			発行年	総ページ数

研究補助を受けた方は、「研究成果報告書」を提出していただき、ホームページ等で研究成果を公開いたします。研究成果が公開できない事情がある場合には、その理由を記述して下さい。

※研究成果を公開できない理由

--